

№ 143 2020年8月2日

御幸町だより

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町通二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『わたしの兄弟、友のために』(詩122編)

牧師 村島 義也

新型コロナウイルス対策として4月19日から5月31日まで教会に集う礼拝を休止しました。この間、教会員・教友の皆さんには、家庭礼拝(分散礼拝)という形で御幸町教会の礼拝と祈りを繋いで頂きました。以下は6月7日(日)、教会礼拝再開時における説教要旨です。

教会礼拝再開の、また長らくお目にかかれなかった皆さんとの再会の嬉しいこの主日、示されているのは詩122編(旧P.969)。小題に「都に上る歌」とあるように、巡礼歌の一つ。作詩年代についてはソロモン神殿が続いた時代(王国時代)に遡るか、バビロン捕囚後の第二神殿の時代か意見が分かれ定かではない。しかしそういった学的論議を必要とせぬストレートで純真な内容が、この詩の優れた特徴だと言えるか。我々の解釈の鍵として一つだけ言えば、この詩に謳われる「主の家」・礼拝の都「エルサレム」は、今や主イエスによる新しい契約の民における「教会」の比喻として理解したい。

1節「主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった」。今日の私たちにピッタリではないか(主の教会に集おう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった)。2節、詩人の感動が伝わってくる。エルサレムに上り神殿を詣でることは主なる神との約束であり、憧れであったが、遠隔地に住まう人々には容易なことではなかつたろう。ただここで大事なことは、詩人は独り喜びに耽るものではないということ。「わたしたちの足は立っている」ということで「わたしたち」の喜びを歌っている。「主の家へ行こう」と言った人々、支え合い、励まし合って共に歩いた仲間たちと喜びを分かち合っている。

古代の巡礼とは異なるが、しかし今日、私は「(今ここに)わたしたちの足は立っている」という思いに共感する。ある意味私たちがコロナによって離散を余儀なくされ、遠くから(物理的な意味だけでなく)、外から教会を思ってきた。「教会に住んでんだからあんたは違うだろう」と言われそうだが、違う。教会を意味するギリシャ語はエクレシア、そもそもの意味は(召されたる者の)集い、集会、旧約的意義を踏まえれば「神の民の集会」、だからキリストによる集い、そのような共同体である。つまり教会は建造物のことではない。

教会とは主の愛の絆に結ばれた我々の集い。先人から受継いだレンガの会堂の息吹は〈皆さん〉、〈わたしたち〉なのである。

3節～新共同訳は4節と繋げてしまって意味がぼんやりしているが、原文では一文を成しておりこういう翻訳もある、「民が共に心を合わせて集まる都として建てられているエルサレム」、或いは「エルサレム、それは仲間がたがいに結ばれる町として建てられている」。「絆」である。心を合わせて集まり互いに結ばれる所として教会は建てられている。「わたしたち」の教会であり「わたしたち」が教会なのだ。

詩人はエルサレムのため、主の家のために祈る、それは「あなたを愛する人々のために」「わたしの兄弟、友のために」。「平和があるように。平安があるように。幸いがあるように」。関根正雄という旧約学者が註解にこう書いている、「聖なる都の故にそのための祈りが当然とされるのではない。一人々々の兄弟、友のためにエルサレムがあるのである。/エルサレムはエルサレムの故に尊いのではない。若しそうならそれはエルサレムという偶像に過ぎない。否それが兄弟、友の救いに役立つ故に尊いのである。このことは教会なり、集会なりにもあてはまる」。建物の教会は拝むべき対象ではなく、主の愛によってそこに結ばれ神の国を仰ぐ人々の集いであってこそ主の家としての教会であり得るのだ。

我々も共に祈ろう、教会のために。それは主の愛を絆としてここに共に立つ私の兄弟姉妹、友のために。我々の教会がこの後も、主の家として・礼拝の宮として、恵み祝され、堅く立つように。この家、我々の主の家のうちに神の平安と幸いがあるようにと。「わたしの兄弟、友のために」。